

謝 辞

石 原 謙

人生70年と言われる境を超えて更に年を重ね老齡を楽しむ幸福は、限りない聖寵によってのみ可能なので、稀にしか許されない喜びでありましょう。しかしその長寿をこの世にあって真に生きるに価する生たらしめるのは、各自のおかれた社会的環境の恩沢に帰し、その間に育まれるお互い同志の情愛と奉仕の使命を全うしようとする誠意とに尽きるようです。幸いにも私は志弱才乏しき身ながら、殊に老後病多く受ける許りで社会人としての責務を果し難くあるのに、今日の社会に全く安泰の生を享受することを許され、しかも自ら選び取った学業の道を歩み得ているのを、無上の喜びとして感謝して止まない次第であります。かような学的交友を顧みるとき、中世哲学会は私の生涯にとって小さくない存在でした。すでに20年近く前、その創設の時以来会員の列に加えられ、委員長に選ばれて十何年かその職を汚し、喜寿を重ねたときは、20名近くの貴重な労作による論文集の贈与を辱うし、更に今回90歳の長寿を祝して新しい計画の議を耳にし、謝するに言葉なき光栄を感じています。

それにしても本学会近来の発展を思うとき、全く隔世の感なきを得ません。戦後会創立の頃もまだ一般の関心は容易でなかったようでしたが、私が60余年前大学院学生としてケーベル先生の指

導の下に教父哲学を学ぼうとしたときなど、大学の教授会から専攻題目の不適当を非難され、改題を要求された位であり、その卒業論文は10年間ほども放置されて、大正8年大学令改正後によく問題とされるという状態でした。しかし私は、ドイツに留学してハイデルベルク大学で古代及び中世哲学を修める中に、教会史家ハンス・フォン・シューベルト教授に接して強い印象と感化を受け、私の一生の方向が決定されたかのように感じました。そのため帰国後は新設の東北大学法文学部の招きに応じて仙台に移り、哲学史と同時にキリスト教思想史を担当するのを、むしろ喜びとしました。第二次大戦中は東京女子大学の責任を負わざるを得なかったが、戦後大学新制実施に伴い、青山学院大学大学院の整備に参加すると共に、キリスト教諸大学の神学科に講義を援助する機会を与えられ、到るところでキリスト教史の研究及び指導に任じ、昭和41年春病に倒れるまで続けました。静養1年の後一切の公務を免れて専ら研学の自由を許されたので、始めてキリスト教史編述の宿願に取組み、5年の歳月を費して一応のまとまりをつけ、46年秋に脱稿して直ちに印刷に附し、昨年『キリスト教の源流』及び『キリスト教の展開』の2巻に分ち、『ヨーロッパ・キリスト教史』上下両巻を公刊し得たのは大きな喜びでした。固より不備にして遺漏も多く過誤も少なくないのを恥じていますが、自分としては老後病弱の身をもって多年の学業の一端に区切りをつけ、わが国学界に些かの寄与を捧げ得たのに満足している次第であります。

この著作は、問題の複雑多岐でしかもこれを整理する才力の乏

しいために当初予期した程度を超えて遙かに大きくなり、これに対する一般の反響をまだ多く聞くに至っていないが、それでも寛厚な旧友や未知の新進学徒の幾人から好意ある書評を賜わったことは感謝に余る喜びでした。特に私にとって感銘の深くあったのは、ドイツ・ハイデルベルク大学神学部教授会が、50年前シュエベルト教授の下に教会史を学修したところを貫いて一生を研究に捧げ、キリスト教学と更に祖国民の思想との交流に尽瘁した業績を評価し、今回の拙著公刊を機として名誉学位 *Doctor theologiae honoris causa* の授与を決し、大学評議員会もこれを諒承して、去る6月4日駐日ドイツ連邦共和国大使より学位記を伝達されたことであります。これは私にとって全く予期しなかった無上の光栄であり、延いては日独両国の学術的親善交歓のしるしでもあることを思い、烏許がましくはありますがここに敢えて附記させて頂きます。

中世哲学会は外形的組織の上では取るに足りない小さな会でありましょうが、その内容と意義とにかけては日本の学術団体の代表的機関であり、私もその一会員であることを誇りとして、殊にこの度の御芳志に対して心から厚く感謝の意を表するゆえんであります。併せて、今後ますます発展されるよう祈りあげます。

1973年7月6日 東京にて